

120 坊さんと猫

昔ですね、坊さんに、白井の長老という坊さんがです。ね、猫を長らく養って、自分の子ども同様に、いつしよに床にも入って眠ったらしい。それが、いつしよに眠っているのにね、朝起きてみたらもう泥だらけで。いつも。

「こりや珍しいねえ、不思議だねえ。どうしようかねえ」と言ってる。あれも知恵比べですね。そして、この坊さんがね、いつしよに寝てから猫が起きて、枕元に坐って、

「本当に寝ているかねえ」と言ってる。坊さんのあれを確かめたら、いびきするでしょう。いびきして寝たふりしたから、ゆつくり出て行きよったそうです。だから、その坊さんもね、やっぱし知恵があるから後を追って、ゆつくりと後を追って行ったら、墓に入って行ってる。お墓に。そしたら、あちらで何しよるかね、と思ったらあの、協議したらしい。やっぱし坊さんは人が死

.....

んだらあれするでしょう、だからそれ、よくわかるでしょうねえ。そして、向こう行って、聞いたら、「何月何日にね、あんたの主を取りに来るから準備しておきなさい」と言ってる。それね、したから。家へ帰ってきて、その時はですね、肉をたくさん炊いて、玄關に捨てたってね。肉は。また、坊さんはね、竹で作ったカーテンでね、巻き上げて、人が載るから強く作って、あつちに坐って。

する時に、こつちに来たから、
「どうしようかねえ、主取って行こうかねえ、この肉取って行こうかねえ。主取って行こうかねえ」と迷っていたらしい。主取ってというのもあるしね、肉取る、両方いたらしいです。で、後は肉取るようになって、肉取って行ったらしい。

字兼城 大城キヨ

